

平成18年12月

「女性医師の働く環境アンケート」結果のまとめ

東京医科大学病院総医局会副会長 大久保ゆかり

近年、女性医師の割合は増加し、病院での医師不足の問題を解消するためには女性医師をいかに労働力として確保するかということが全国的に課題となっている。そこで、東京医科大学病院に勤務する女性医師を対象に、平成18年9月、女性医師の働く環境アンケートを行った。さらに平成18年10月、女性医師代表者による意見交換会を開き、アンケート結果をもとに話し合い、具体的な意見を確認した。それらをもとに女性医師の意見をまとめた。

1. 女性医師の状況と問題点

① 多くの女性医師は、1日平均9～12時間の勤務と月平均1～5回の当直をこなす時期であり、かつ中堅として病院の診療・教育・研究を支える35～39歳の女性医師勤務数はわずか10名、全体の1割と最も落ち込んでいた。これはこの時期がちょうど結婚・出産・育児、特に子供の教育時期と重ならざるを得ないためと考えられる。さらに子育てをしながら働いている女性医師はわずか17名、全体の2割にしか過ぎなかった。一方、8割の女性医師は出産後も働きたいと思っていることがわかった。この結果からわかることは、働きたい意志はあるものの現実には続けられなくなりやめていく医師が多いことである。従って、本人の努力に加えて周囲の配慮や働く環境の改善が必要であると考えられる。

② 男女格差については、約6割の女性医師は男性と平等に扱われていると考えていた。約4割は不平等を感じており、この内容は昇進や教育の順番や、教育や出張場所の選択で、男性が優遇されているというものであった。しかしこれは科によって事情が異なるようであった。一方、女性として職場で配慮されていることも約4割の女性医師は感じている。その内容は妊娠や子育て中の女性医師に対する勤務体制・勤務時間・出張先や時期の考慮、当直の軽減・免除などである。しかしこれも科によっては全く配慮されていない場合もあり、今後は全体として統一した見解が必要である。

- ③ 性医師が仕事を続けていく上で必要な条件としては、職場では妊娠・出産・育児への配慮・理解や、保育制度・設備の充実が望まれた。特に子育て中には、子供の緊急時に職場の協力が得られることが最も必要な援助であった。
- ④ 保育設備としては、院内保育園を約8割の女性医師が切望していた。そのうちの半分は24時間保育を希望している。当直が月平均1～5回あることを考えれば当然の要望と考える。また、子供が急病時には通常の保育園は預かってもらえないため預ける施設がなく、結果として仕事を休まなければならない職場に迷惑をかけることに対して多くの女性医師は心を痛めている。従って病児保育の制度は必要であり、アンケートでも約9割の女性医師が必要としている。
- ⑤ 産前産後や育児休暇後などの復帰に不安がある女性医師は約8割で、特に、医療技術や診療能力の低下や復帰後の昇進に大きな不安を感じていた。再教育支援が必要である。

2. 問題解決への提言

第一に職場での妊娠・出産・育児への配慮や理解が必要であるが、これが男女の新しい格差をもたらすものであってはならない。男女を超えて全ての医師や医療従事者にとって働きやすい環境を整えるという観点から解決するべきである。今後は育児だけでなく、介護でも男女を問わず支援が必要になる時代になると考える。

このような改革をサポートするNPO法人「働きやすい病院評価」も平成17年より設立されている（参考資料3-3）。大阪厚生年金病院をはじめ3つの病院が認定され、さらに現在近畿地区の大学病院でも検討中である。

3. 早急に取り組むべき課題

① 男女共同参画委員会の立ち上げ

男女含めた医師だけでなく、事務系、医療従事者全体からなる委員会で話し合っ問題解決にあたる必要がある。

② 東京医科大学病院における保育環境の整備

院内保育園の整備。24時間保育、延長保育、病児保育、非常勤医師の利用の検討を含む。

参考資料として、同窓会が中心に経営している院内保育園の例（3-1）と外部委託した場合の院内保育園の例（3-2）を添付する。

- ③性別を超えたワークシェアやフレックス制などの新しい勤務形態の導入
非常勤医師や休業医師を登録し、ワークシェアなどを手配する部署の設置。
参考資料 3-4 に示すように、すでに日本医師会でも医師再就業支援事業として、
女性医師バンク中央センターを創設・運営を開始した。なお、この事業の担当理事
は、東京医科大学昭和 48 年卒の日本医師会常任理事、羽生田 俊先生である。
- ④復職時の再教育・研修制度
すでに日本医師会（参考資料 3-4）や東京女子医科大学（3-5）などで始まっ
ている。
- ⑤多様な女性医師像（ロールモデル）の女子学生や若い女性医師への提示
先輩女性医師の話を聞く会を年に 1～2 回開催する。
慶応義塾大学や東京女子医科大学、地域の医師会などですでに始まっている。
- ⑥東京医科大学同窓会との連携
このような女性医師問題は、多くの私立医科大学では同窓会と連携して解決に当た
っている。慶応義塾大学や東京女子医科大学のように、同窓会で保育園の経営や女
性支援室の設置を行っているところもある。

最後に、アンケート作成には人事課の龍崎之彦様さんに、アンケート配布・回収・
解析にあたり総務課の山岸和義さんに、多大なご尽力を賜りましたことを深く御礼
申し上げます。